

釧路湿原西縁(鶴居村)の遺跡について

澤 四郎^{*}・西 幸隆^{*}・松田 猛^{*}・加藤春雄^{*}

On the Sites in the Hill Area to the West of Kushiro Marsh,
Tsurui, Eastern Hokkaido

Shirô Sawa^{*}・Yukitaka Nishi^{*}・Takeshi Matsuda^{*}・Haruo Katô^{*}

I. はじめに

釧路市の北側に隣接して位置する鶴居村は、面積およそ571km²を有し、南東部で釧路湿原の低地を含み、北西部で阿寒・屈斜路火山群に連なる丘陵地から成っている。丘陵地を切刻して流れる雪裡川・茂雪裡川・幌呂川をはじめとする大小の河川は、一様に釧路湿原の低地へ流路をとり、釧路川と合流し太平洋へ注いでいる。釧路湿原に面する西縁では標高20mを越える平坦な台地と、標高7-10m前後の低地が広がり、東縁の台地とは異なった様相を呈している。鶴居村におけるこれらの台地及び低地、各河川に面する台地に分布する遺跡については、これまで本格的な発掘調査や分布調査が実施されておらず、遺跡分布の傾向や立地、及び個々の遺跡の性格等について詳細に把握するまでには至らない現状にあった。

しかし、遺跡の分布調査は、これまでに部分的ながらも実施されてきており、古くは昭和35年、筆者のひとり澤により行われた下雪裡・中雪裡・茂雪裡地区における踏査にはじまる(澤ほか1960)。この年、12箇所の遺跡を確認しており、昭和44年には、このうち下雪裡西竪穴群(下雪裡第2竪穴群)出土の遺物について紹介している(澤1969)。その後、昭和46年に至り釧路市立博物館による「釧路湿原総合調査」が開始され、この一環として湿原周縁の台地における分布調査が行われている。昭和46年9月のキラコタン岬・宮島岬周辺の踏査(澤1971)、同年の宮島岬周辺の踏査(澤・橋本1971)、翌年の温根内・下幌呂周辺の踏査(澤ほか1972)、さらに未報告の踏査を含め相次いで実施されてきた。これらの調査結果については、既に釧路湿原調査報告書に取りまとめ報告したところである(澤・西1975・1977)。

この間、昭和47年から48年にかけて釧路第一高校考古学部により温根内・下幌呂周辺の踏査も行われ15箇所の遺跡が追加された(小西1974)。また、同時に釧路湖陵高校考古学部による踏査も行われ、下幌呂遺跡(下幌呂1遺跡)の資料が両校によっても採集されている(澤・

西1974)。

釧路湿原周縁の遺跡分布調査は、総合調査終了後も継続して実施されており、昭和54年12月には、キラコタン岬周辺で6箇所、宮島岬周辺で2箇所の遺跡を確認し、このとき計測を行なった中田牧場第1・第2チャシ(下雪裡1・2チャシ)について報告している(西1980)。その後も、キラコタン岬・宮島岬・下雪裡・温根内周辺の部分的調査を実施してきたが、その結果、当初15箇所であった遺跡も昭和59年には55箇所を数えるに至った。しかし、湿原東縁の台地に較べその数も極めて少なく、更に本格的な分布調査の必要性が望まれていた所である。

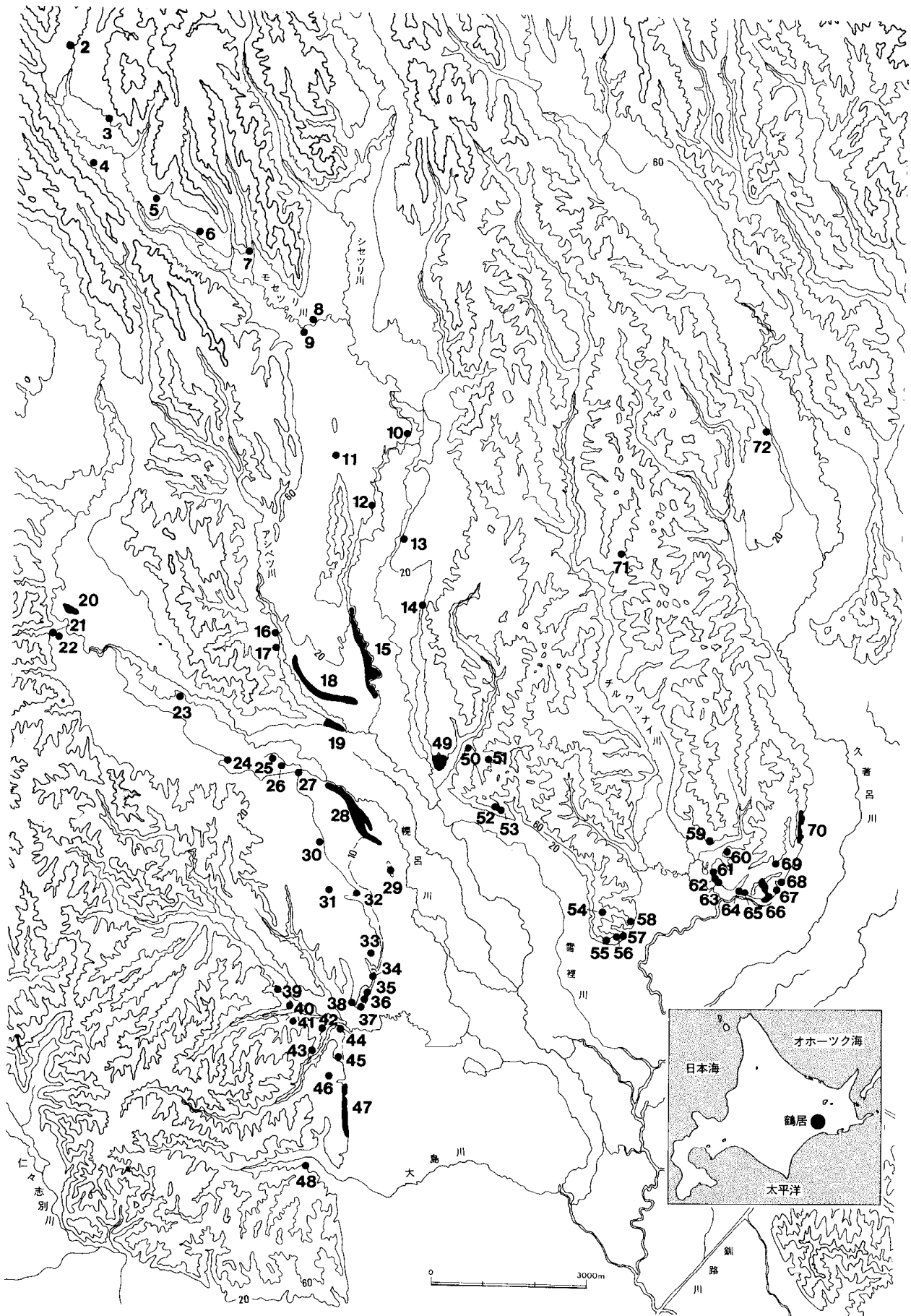
昭和60年に至り、釧路市立博物館では、湿原西縁の台地における未踏査箇所の分布調査を計画し、6月5日～7日、18日～21日の延べ7日間、筆者らにより鶴居村温根内・下幌呂・下雪裡・中雪裡・宮島岬・キラコタン岬周辺を対象に踏査を実施した。その結果、更に17箇所の遺跡を追加することができたので、ここに過去に採集された資料もあわせて紹介し、また、湿原西縁の台地における遺跡立地のあり方についても触れておきたい。

なお、図示した資料の石質鑑定については北海道教育大学釧路分校岡崎由夫教授にお願いした。また、石器実測図の一部については釧路市埋蔵文化財調査センター山岸隆弘氏の作図による。あわせて深く感謝申し上げる次第である。

II. 鶴居村の遺跡

昭和60年度の分布調査により新たに確認した遺跡は、中雪裡1・2遺跡、下雪裡6・7遺跡、下雪裡第4竪穴群、中幌呂3遺跡、下幌呂11～14遺跡、温根内7遺跡、温根内第1竪穴群、大島川1遺跡、宮島岬4遺跡、チルワツナイ川2・3遺跡、キラコタン第2竪穴群の17ヶ所である。この他、アシベツ川右岸遺跡と下幌呂1遺跡は、範囲がより拡大することを確認した。鶴居村内の遺跡分布図は第1図に、一覧表は表1に示した。各遺跡の立地、地表面からの観察結果、採集遺物などについて見ていく

^{*}釧路市立博物館(Kushiro City Museum, Kushiro, Hokkaido)



第1図 鶴居村の遺跡分布図

ことにする。

雪裡川の支流茂雪裡川流域には9箇所の遺跡が存在する。茂雪裡6遺跡（1）は、右岸の標高190mの台地上に位置し、石器が採集されている。茂雪裡5遺跡（2）は、標高110m、茂雪裡川右岸、茂雪裡川とシタトシナイ川に挟まれた台地の先端部に位置し、削器が2点報告され（澤ほか1960）、その後石鏃が採集されている。茂雪裡4遺跡（3）は、左岸の標高110mの台地上にある。農道工事中に遺物が出土したという。茂雪裡3遺跡（4）は、茂雪裡川右岸、標高90m、脇差が1点出土している。茂雪裡2遺跡（5）は、川から300mほど離れた左岸、標高80mの台地上にあり、土器片・石鏃・石槍・石斧などが出土している（澤ほか1960）。茂雪裡1遺跡（6）は、茂雪裡川左岸、標高60m、川との比高差のあまりない河岸段丘上に位置し、畑地として耕作時に石鏃・石槍・石臼などが出土したという（澤ほか1960）。四号の沢遺跡（7）は、茂雪裡川左岸、標高55m、茂雪裡川に流れ出る小川の右岸台地にあり、土器片・石鏃・石槍・石斧などが採集されている（澤ほか1960）。中雪裡チャシ（8）は、茂雪裡川左岸、標高35mの平坦な台地上に存在する径11m前後、高さ3.5mの小丘上に位置する。壕は観察できないが、古くからチャシ跡として伝えられている。中雪裡1遺跡（9）は、中雪裡チャシのほぼ対岸に位置する。遺跡附近一帯は、土木工事により破壊されており、黒色土の露出しているところで北筒Ⅲ式土器・石槍・黒耀石の剥片などを採集した。

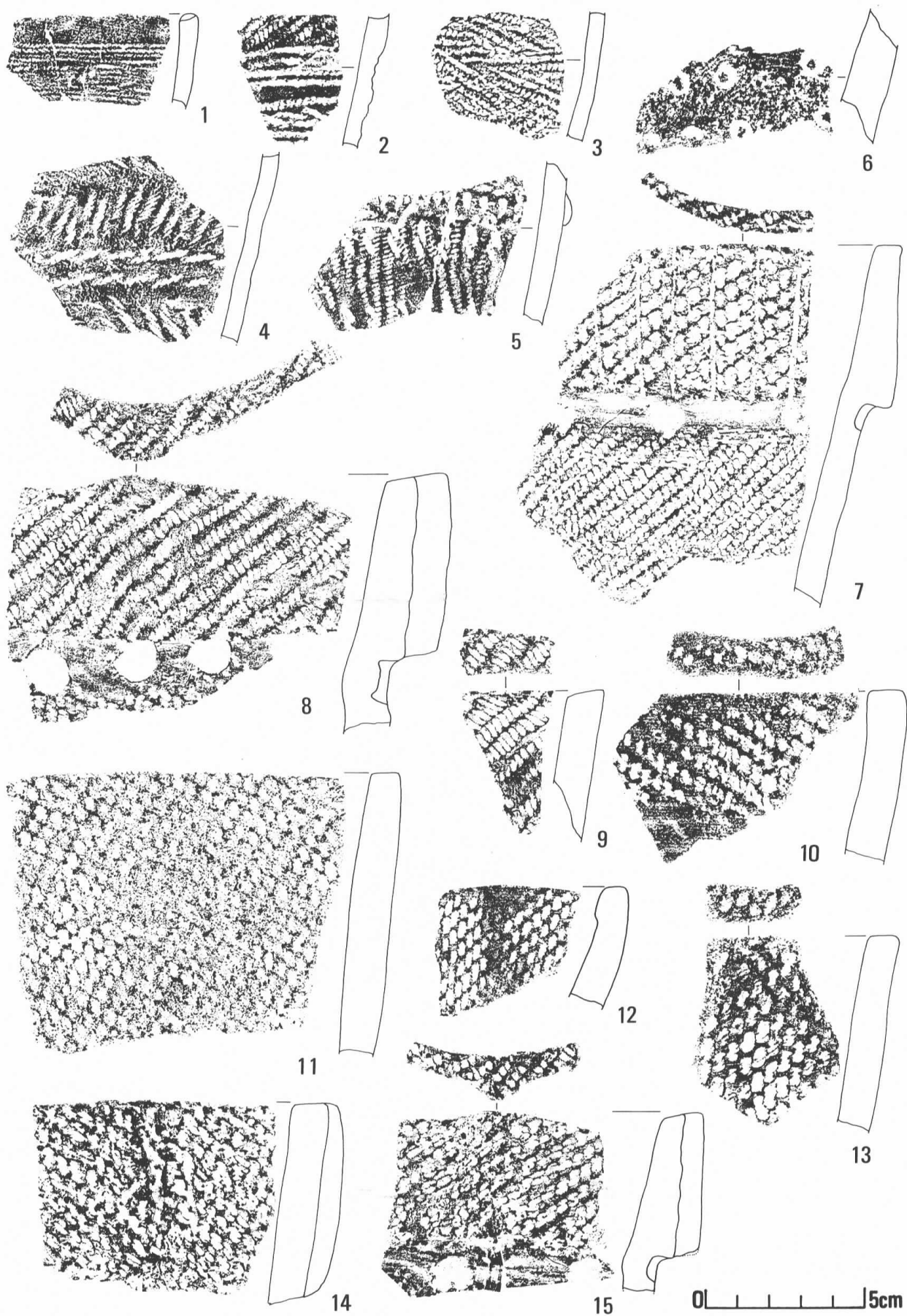
中雪裡2遺跡（10）は、雪裡川の右岸、標高24mの河岸段丘上にある。雪裡川に面する台地先端部附近の畑や道路の切通し面から北筒Ⅲ式土器・黒耀石の剥片などを採集した。下雪裡2遺跡（11）は、雪裡川の右岸、標高40m前後の丘陵鞍部に位置する。雪裡川とは900mほど離れている。有舌尖頭器1点と縄文中期の土器片が採集されている。下雪裡第3堅穴群（12）は、小支流が雪裡川に流れ出る台地先端部の両岸にあり、標高20mを計る。擦文期の方形堅穴が6軒と円形の浅い大きな窪みが2ヶ所確認されている。下雪裡3遺跡（13）は、雪裡川左岸、標高20mの平坦な河岸段丘面の先端部に位置しており、黒耀石の剥片を採集した。下雪裡1遺跡（14）は、標高17m、丘陵の裾に沿って流れる雪裡川の支流西岸に位置し、山刀が1点採集されている。

下雪裡第2堅穴群（15）は、雪裡川右岸、川に面した標高10m前後の河岸段丘上に位置し、ほぼ南北に1.8km、東西幅200～400mの拡がりをもつ大規模な遺跡である。川との比高差は2～3mを計る。擦文期とみられる32軒

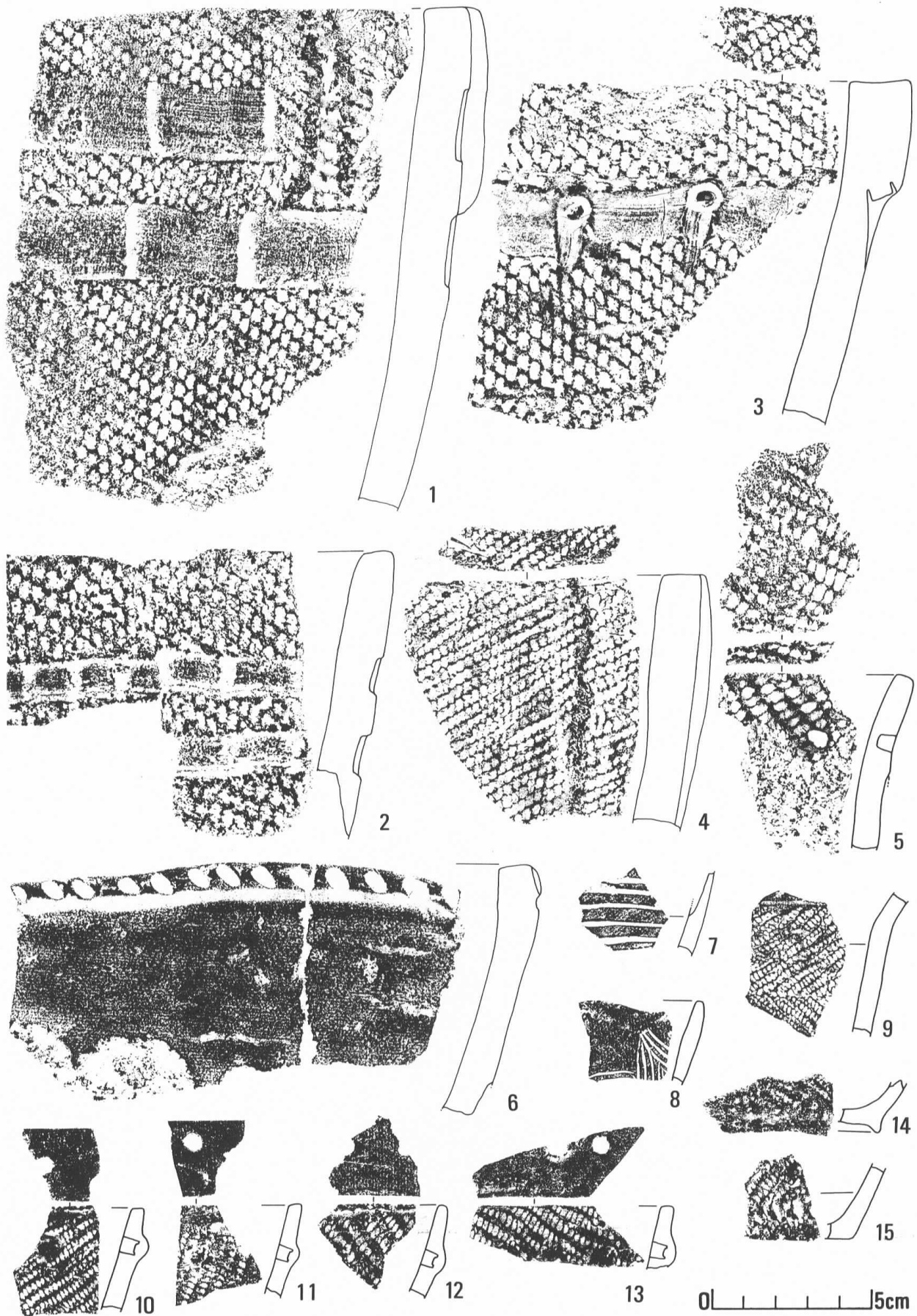
の堅穴群が存在したといわれるが（澤1960）、現在は草地や畑として整地され確認できない。本遺跡採集資料は、過去に縄文後期末の土器が報告されている（澤1969）。その後の資料を第2～4図に示した。第2図1～5は東釧路Ⅲ式、6～8は北筒Ⅱ式、9～15・第3図1～4は北筒Ⅲ式、5は北筒Ⅳ式である。第3図6は、鮫淵式と考えられる土器片である。7・8は沈線の施された土器で、8は先に報告された土器の仲間であろう。9は羽状縄文が施され、口縁部はくの字状に外反する。10～13は、突瘤文のある土器、14・15は底部で、14は揚底、15は爪形文がみられる。第4図1～3は口縁部に無文帯をもつ土器である。4は下田ノ沢Ⅰ式、5～9は後北C₂式、10・11は擦文土器である。石器は第4図12～19が石鏃、20・21が石槍である。22～25・第5図1～5はナイフ状で鋭角な先端部をもつ。6～8・10は粗雑な剝離であるが、両面に二次加工されている削器、9は円形の搔器である。11～19は片面加工の削器で、13・14はえぐり込みをもつ。11はハリ質安山岩製。20は磨製石斧である。

雪裡川の支流アシベツ川流域では、新たに3箇所で遺跡を確認した。最も上流に位置する下雪裡7遺跡（16）は、アシベツ川右岸、標高20mの川に面した台地上に存在していたが、土砂採取工事により大半が消滅している。資料は第6・7図に示した。第6図1～3は北筒Ⅲ式、4は後北C₂式土器である。第7図1は石刃鏃、2～4は石鏃、5～7は石槍である。8～14は両面加工の施された削器、5～33は片面の一部に二次加工がみられ、33は原石面を残す。下雪裡6遺跡（17）は、下雪裡7遺跡より200mほど下流の同じ台地上に位置する。小さな沢を挟んだ両側に方形堅穴が6軒存在する。沢の北側は、草地改良の影響をあまり受けていない川や沢に沿った先端部附近で、4×4m・深さ50cmの堅穴4軒、4×5m・深さ50cmの堅穴1軒を確認した。南側は地主の了解が得られなかったため道路際で4×4m・深さ1mの1軒を確認したにとどまる。いずれも擦文期の堅穴住居址とみられる。

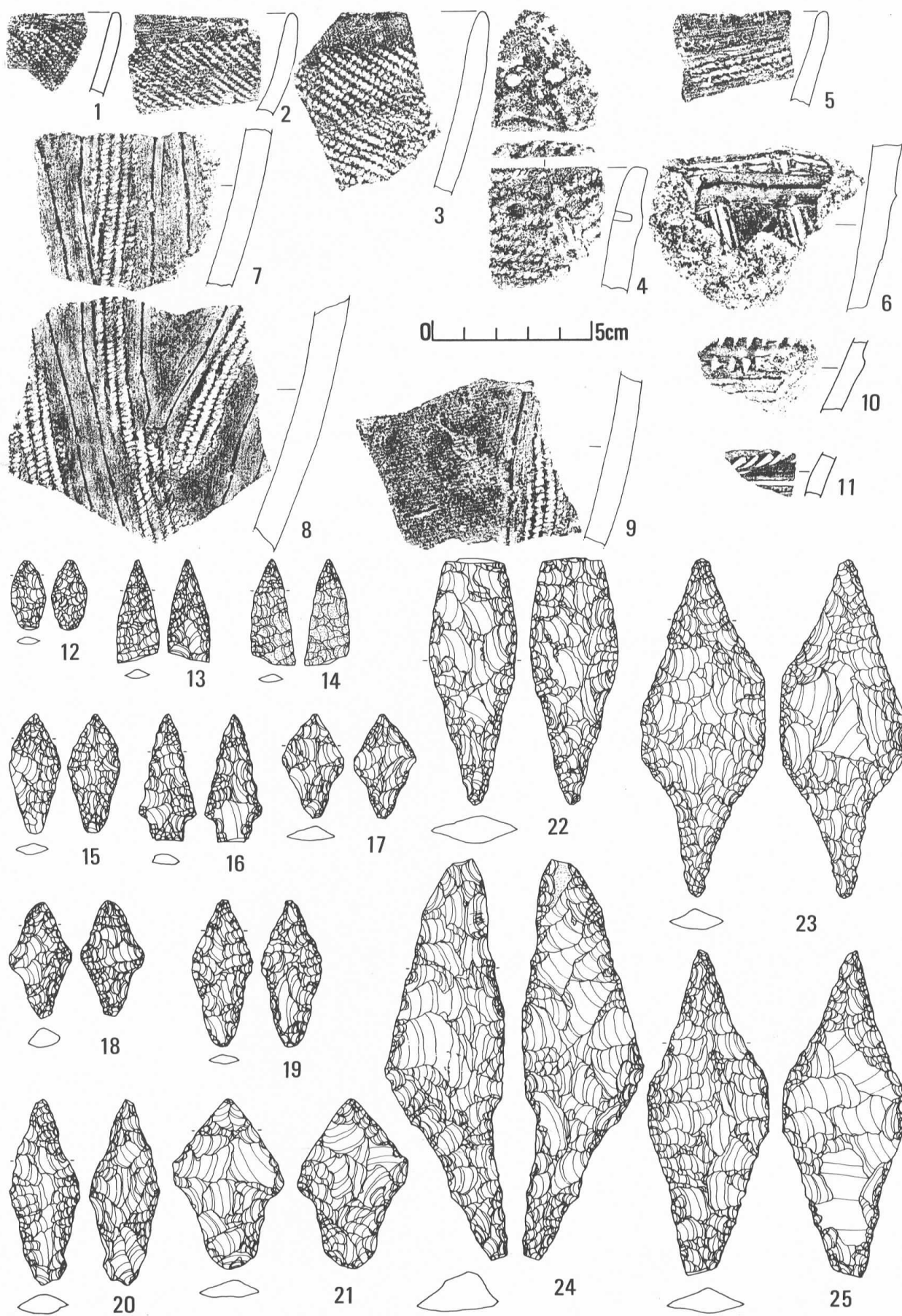
下雪裡第4堅穴群（18）は、アシベツ川左岸、川に沿った河岸段丘上に位置し、その拡がりほぼ東西に1.4km・幅300mを計る。標高は10～15m、川との比高差は上流で約5m、堅穴群の集中する下流では1mに満たないところもあり、低湿地となっている下流域にも拡がっている。堅穴群は2箇所で観察され、1箇所は全体のほぼ中央部に29軒存在し、台地のやや高い所では、一辺が5m前後・深さ1mを越えるが、川に面した低い所では一辺が4m前後・深さ30～50cmと規模が小さくなる。他



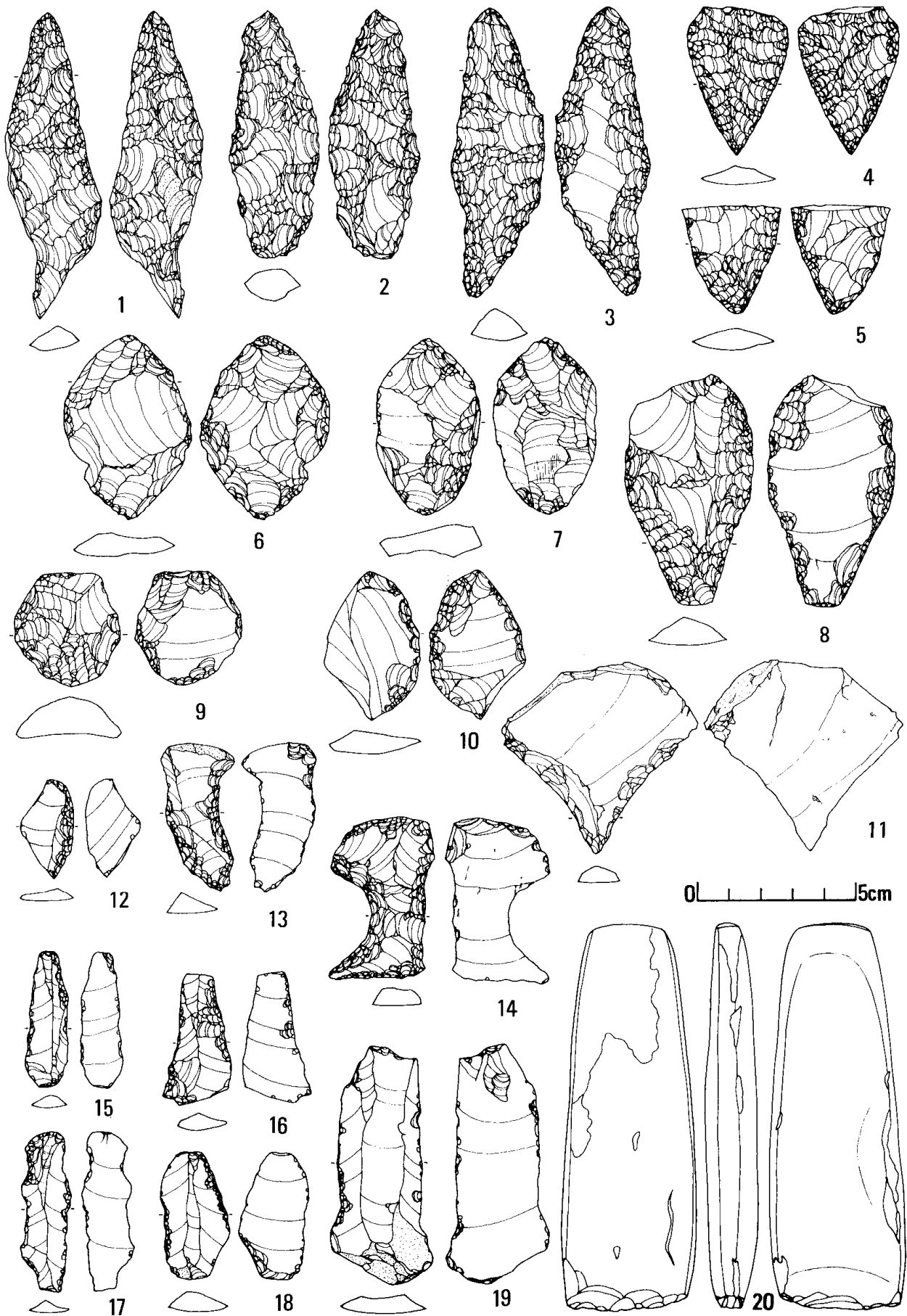
第2図 下雪裡第2豎穴群採集遺物(1)



第3図 下雪裡第2 豎穴群採集遺物(2)



第4図 下雪裡第2豎穴群採集遺物(3)



第5図 下雪裡第2 豎穴群採集遺物(4)

の一箇所は、この竪穴群より400mほど上流に存在し、5軒観察できた。草地改良により3軒がかなり埋没しており、また1軒はアシベツ川により削られつつある。大きさは、明確な例で一辺が5m・深さ1mを計る。いずれも擦文期の住居址とみられる。本遺跡採集遺物は第8・9図に示した。第8図1～12は東釧路Ⅲ式、13～15は東釧路Ⅳ式、17は縄文、18・19は北筒Ⅲ式土器である。第9図1は手稲式とみられ、下雪裡第2竪穴群採集の鮎潤式と同様釧路地方では他に例をみない。4・5は突瘤文・爪形文をもつ土器で縄文晩期初頭頃と考えられている。石器は、5の石鏃、6～10・13の削器、11・12の縦形石匙などが採集されている。

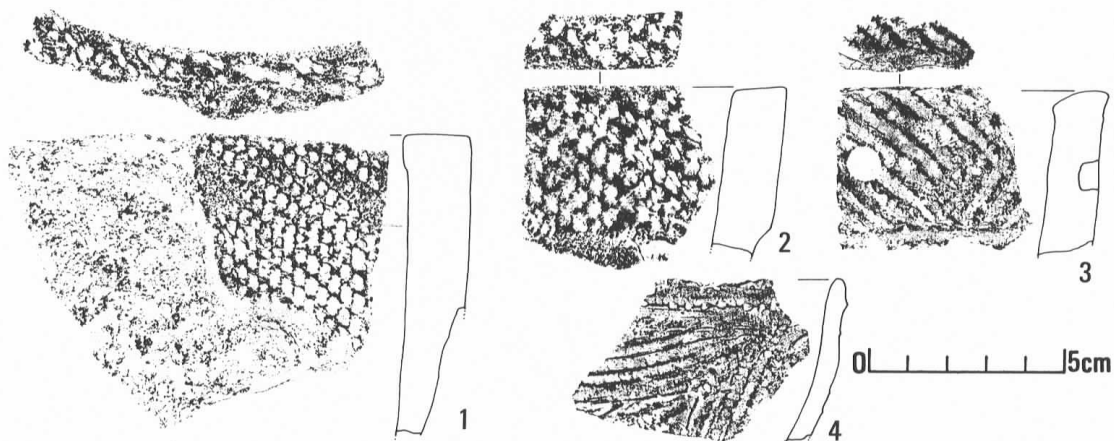
アシベツ川右岸遺跡(19)は、下雪裡第4竪穴群の対岸、西側から東に向って伸びる丘陵の先端部附近である。標高は10～20m。本遺跡は、これまで国道を挟んだ西側の部分とされて来たが、東の湿原側にも拡がっていることが確認できた。遺跡の主体部は、道路や土砂採集工事によりほとんど消滅している。湿原に突き出た先端部は、幅20m・奥行き25mの舌状台地で、一辺4～5m・深さ80cmの方形竪穴3軒と径3×4m・深さ30cmの浅い落ち込み1箇所を確認した。前者は擦文期、後者は縄文中期頃の竪穴であろう。本遺跡採集遺物は第10・11図である。第10図1は表面が剥脱しているが、裏面には横走る条痕文がみられ石刃鏃文化期に伴うものであろう。2～17は東釧路Ⅳ式である。第10図19～20は石刃鏃、21～23は石鏃、24～50・第11図1は石刃で側縁部に2次加工されている例もあり、40～43の小形の石刃を伴っている。第11図2～5は彫器、6・7は石刃を利用した常呂型ナイフと呼ばれるもの、8～10は搔器、19は縦型石匙、20は石核残欠、21は石刃石核である。22は石鋸、23は石錘、24は擦切磨製石斧である。

中幌呂3遺跡(20)は、幌呂川左岸、標高30m、川との比高差3～5mの河岸段丘上に位置する。遺跡の大部

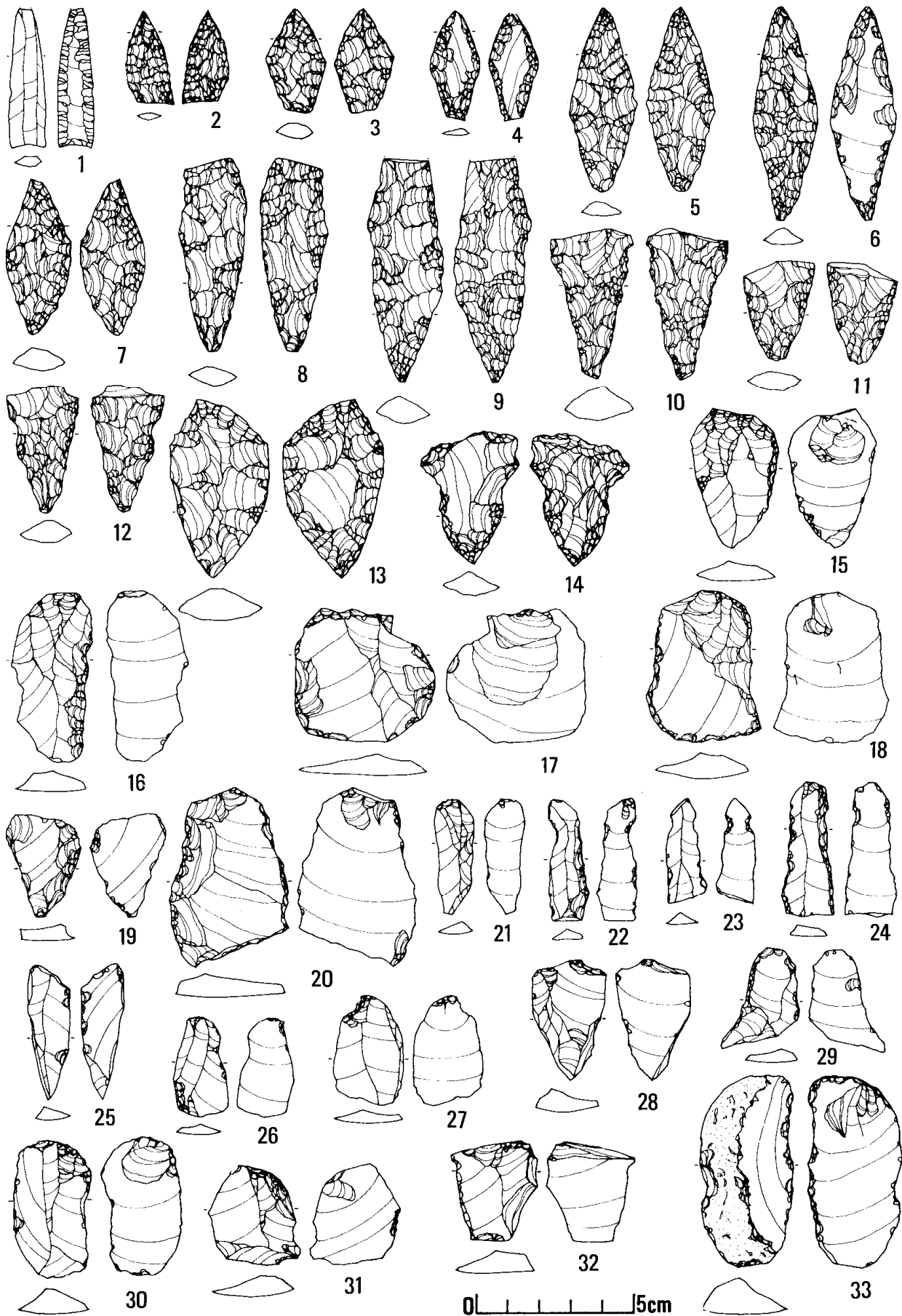
分は、河川改修による工事により破壊されていた。遺物の拡がり東西250m、南北に70mの範囲である。台地の北側先端部に円形の浅い落ち込みが1ヶ所、工事により削られた断面で墓墳とみられる袋状の落ち込みが1箇所観察できた。採集した遺物は、第12図1の中茶路式、2の北筒Ⅲ式、3の薄手で縄文の施された土器などがある。石器は、写真1に示した。石鏃・石槍・縦型石匙・削器・磨製石斧などである。中幌呂竪穴群(21)、中幌呂2遺跡(22)は、中幌呂3遺跡の対岸に位置する。前者は、標高25mの台地上に擦文期とみられる方形竪穴2軒が確認されていたが、内1軒は炭窯址であった。後者は、それより1段高い標高30mの台地上で北西―南東方向に250m、幅80mの範囲に拡がり、縄文中・晩期の遺物が採集されているという。中幌呂1遺跡(23)は、幌呂川の左岸、標高25m、川との比高差2～3mの低い河岸段丘上に位置する。かつて、暗渠工事の際に多くの土器片・石器が出土している。

下幌呂14遺跡(24)・下幌呂13遺跡(25)・下幌呂12遺跡(26)・下幌呂11遺跡(27)は、いずれも幌呂川右岸、標高15m、川との比高差2～5mの河岸段丘上に位置する。14遺跡では、道路の切通し面より北筒Ⅱ式、晩期初頭頃の土器片・黒耀石の剝片などを採集した。13遺跡は、14遺跡より600m下流、幌呂川向って張り出した台地の先端部で、東西200m・南北100mの拡がりをもつ。先端に径5m・深さ30cm前後の浅い円形の落ち込みが2箇所ある。道路の切通し面や畑から東釧路Ⅲ式、縄文晩期頃の土器片、黒耀石の剝片などが採集できた。12遺跡は、13遺跡より100mほど下流、小さな沢を隔てて存在する。径4m前後の浅い円形竪穴が3軒存在する。11遺跡は、さらに150mほど下流で、径4m前後の浅い円形の竪穴4軒を確認することができた。

幌呂川が湿原へ出る右岸の台地に下幌呂1遺跡(28)が存在する。遺跡は、幌呂川に面した標高10～17mの台



第6図 下雪裡7遺跡採集遺物(1)



第7図 下雪裡7遺跡採集遺物(2)

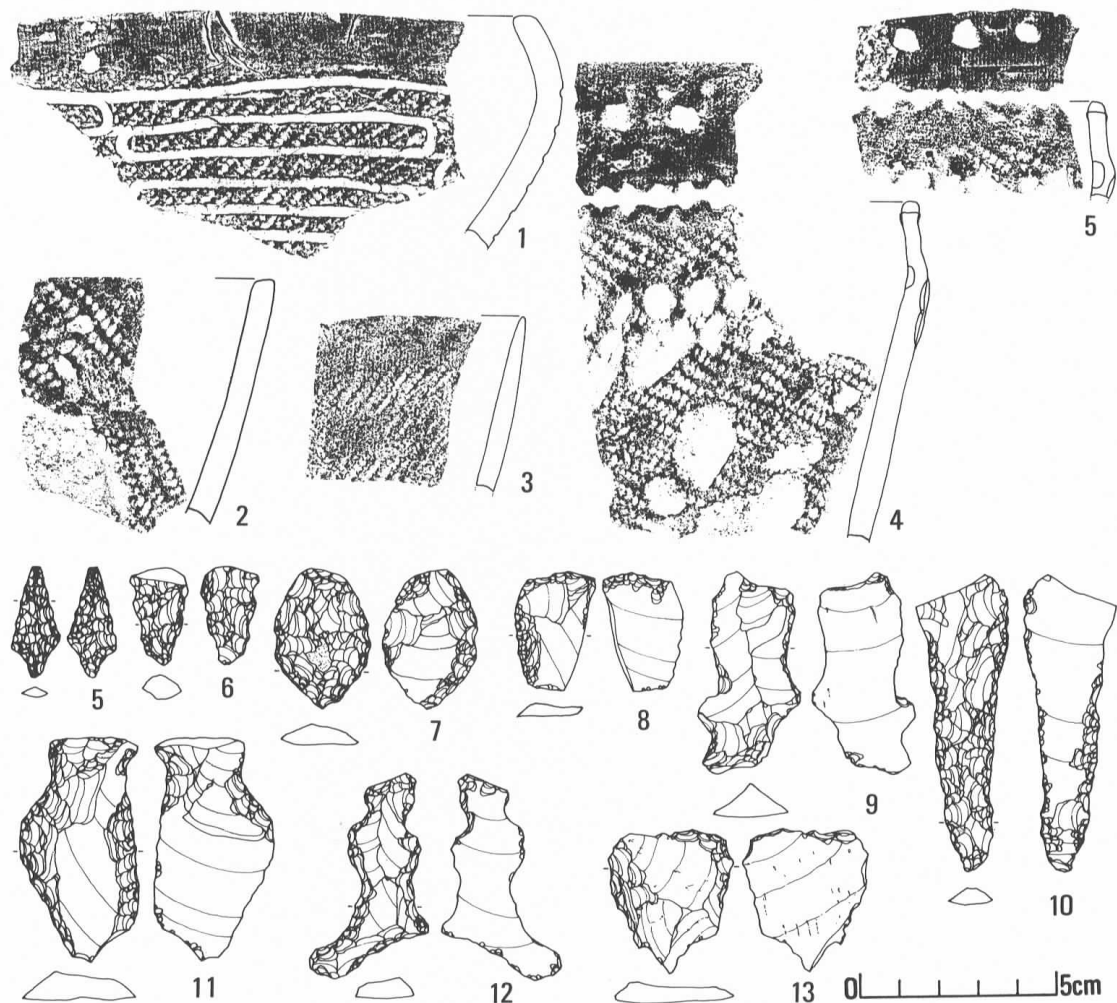


第8図 下雪裡第4豎穴群採集遺物(1)

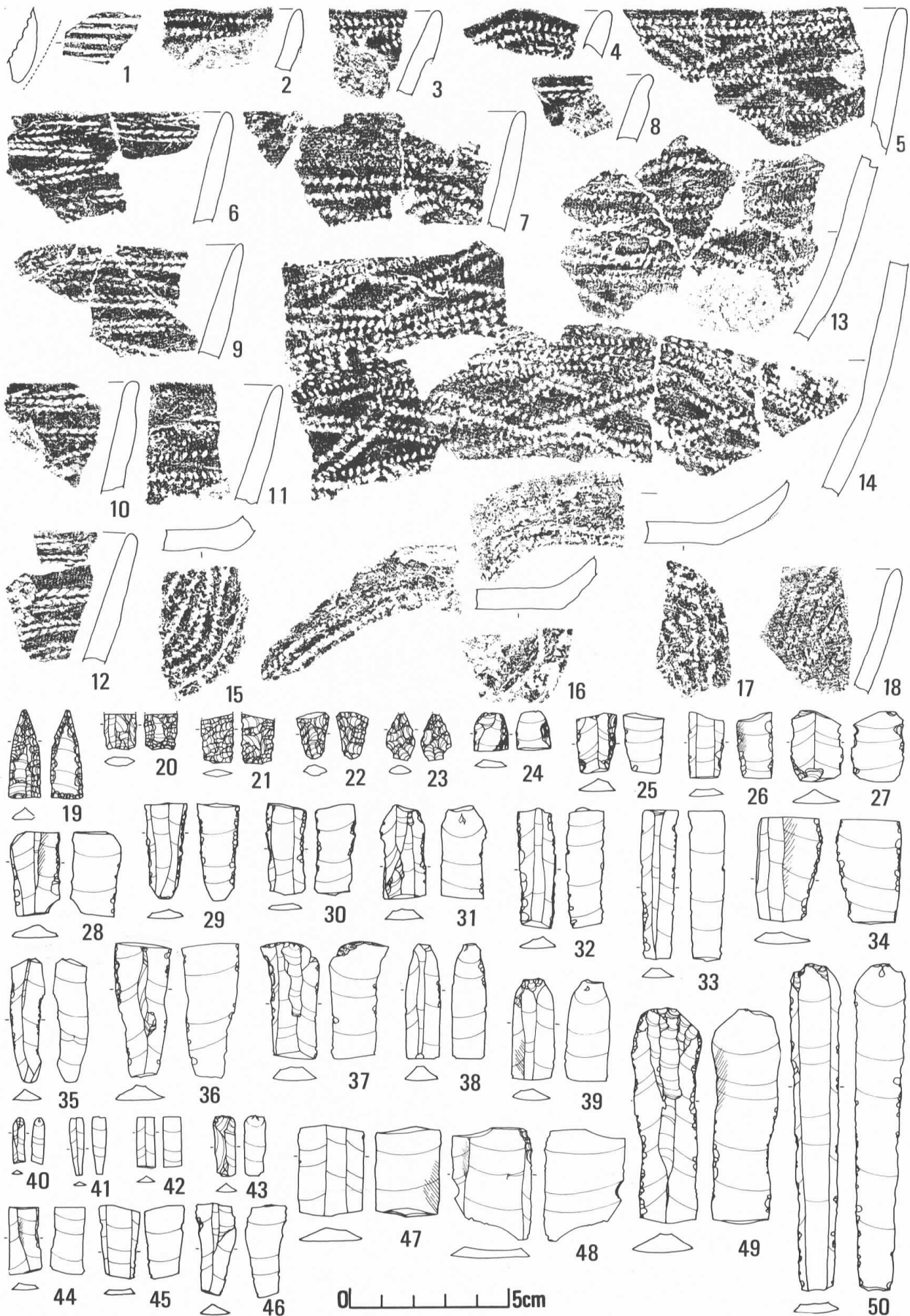
地と標高7～10mの低湿地帯に広がる。また、これまでは国道を挟んで東側の部分とされて来たが、西側にも広がっていることを確認した。西側では、径4m前後の浅い円形の落ち込みが4箇所確認でき、黒耀石の剥片を採集した。この部分はすでに草地改良されており、他にも住居址が存在するとみられる。遺跡の広がり、北西—南東方向に約1.5km、幅250～350mの広い範囲におよび、西端で標高17m、湿地帯は8m前後であり川との比高差は1mに満たないくらいである。湿地帯は、最近大規模な草地改良による暗渠・明渠工事が行われ、多量の遺物が採集されている。また、工事の断面で数多くの堅穴や土壌が観察できた。この遺跡から採集された遺物は、以前に報告されている（澤・西1974）。その後の採集資料は第13～18図に示した。第13図1～3は東釧路Ⅲ式、4は網文、5も網文土器の仲間であろう。6はモコト式、7～10・14図1・2は北筒Ⅱ式、3～5は北筒Ⅲ式、6は北筒Ⅳ式である。第15図1は横走する沈線と縦沈線が

施されている。8は小型の盃形土器で、高さ2.7cm・口径3.6cm・底径2.9cmを計る。11～15は口縁部に無文帯をもつ土器で、11・12は口唇部に縄文、13～15は刻み目が施されている。石器は、第15図16～19が石鏃、20～30・32が石槍、第16図1・2は削器、第15図31・第16図3～12は石匙、13は搔器である。14～23、第17図1～11は削器で12～18は縦形の剥片にわずかに二次加工が施されている。19は砂岩製の砥石、20・21・第18図1～6は磨製石斧である。

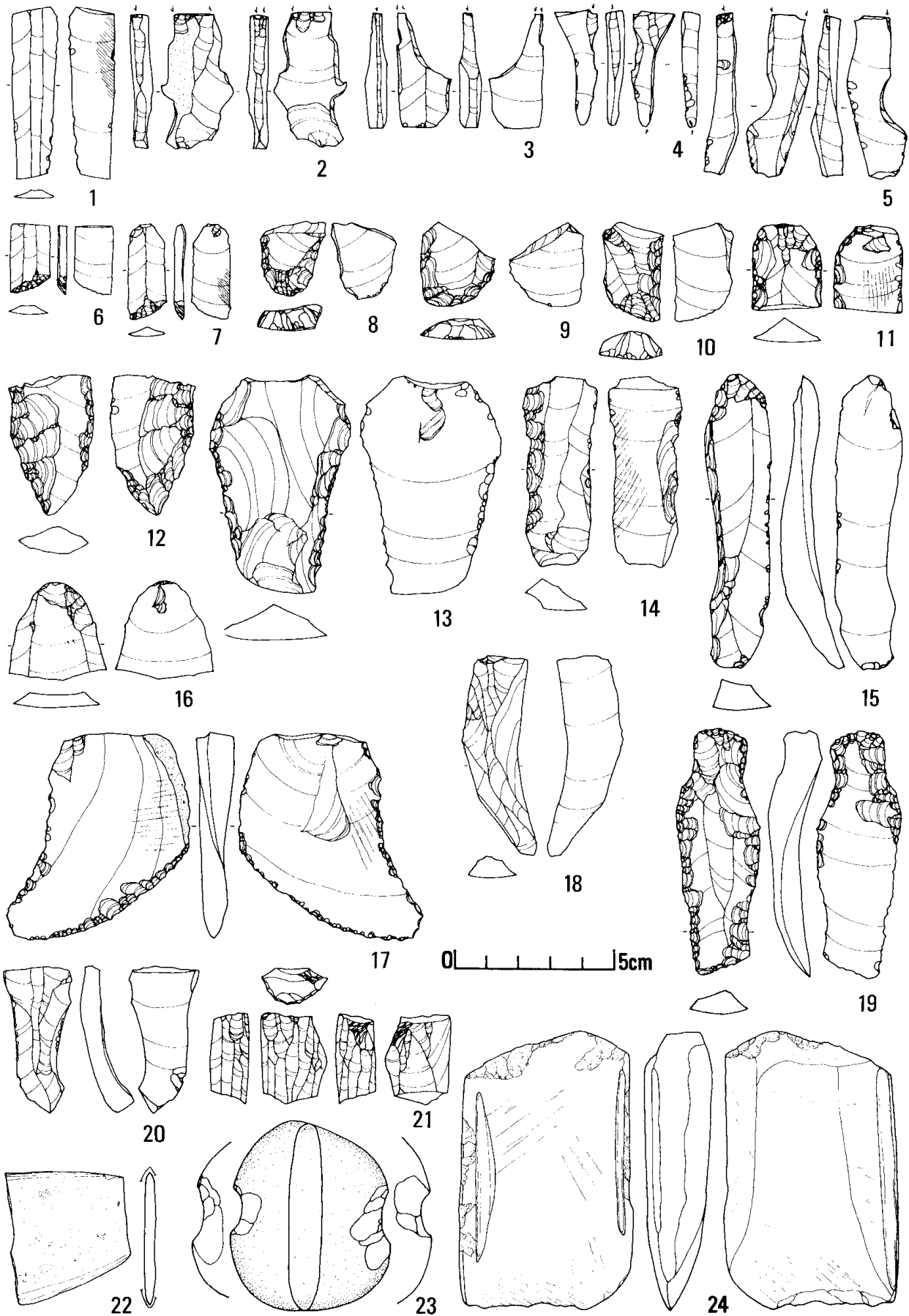
ポンポン山遺跡（29）は、下幌呂1遺跡より250m下流に存在する南北300m、東西100mの独立丘上に存在する。標高13mで、湿地帯との比高差は7mほどである。この独立丘上の平坦面に長辺20m、短辺12mの落ち込みが観察できる。下幌呂2遺跡（30）は、湿原を望む標高40mの台地上に存在していたが、土砂採集工事により大半が破壊されている。東釧路Ⅲ式・北筒Ⅱ式が採集されている。下幌呂3遺跡（31）は、湿原西縁の台地に入り



第9図 下幌呂第4堅穴群採集遺物(2)

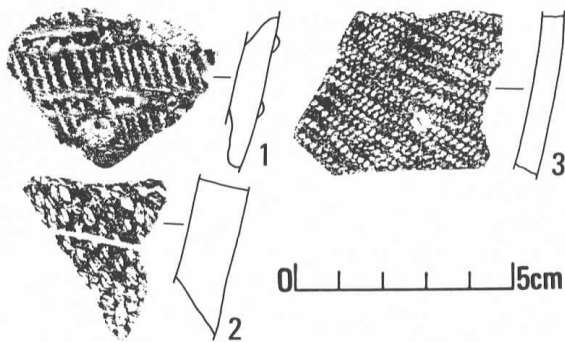


第10図 アシベツ川右岸遺跡採集遺物(1)



第11図 アシベツ川右岸遺跡採集遺物(2)

込む沢の北に位置し、標高35mを計る。縄文早・中期の土器片が採集されている。下幌呂4遺跡(32)は、同じ台地の先端部に位置するが、主体部は土取り工事により破壊されている。標高20m。東釧路Ⅲ式・後期末晩期初頭の土器が採集されている。下幌呂5遺跡(33)は、湿原側から入り込む沢の北側、標高25mの台地上に、下幌呂6遺跡(34)は、同じ沢の南側、標高20mの台地先端部に位置する。共に縄文期の遺物が採集されている。下幌呂7遺跡(35)は、6遺跡より150mほど南側、湿原に面する標高15mの台地上に位置する。縄文と緑ヶ岡式土器が採集されている。小さな沢を挟んだ南側に下幌呂8遺跡(36)が位置する。標高15m、湿原との比高差10m前後を計る。縄文期の遺物が採集されている。下幌呂9



第12図 中幌呂3遺跡採集遺物(1)

遺跡(37)は、下幌呂8遺跡から連続して広がっており、南北200m・東西40mの範囲に、径5m前後・深さ30~50cmの円形竪穴11軒、それよりやや深い4×5mの方形竪穴2軒が点在している。北筒Ⅲ・Ⅳ式・後期末晩初頭の土器・緑ヶ岡式土器などが採集されている。

下幌呂10遺跡(38)は、小さな沢を挟んで9遺跡の西側に位置し、温根内川に面した標高20~30mの丘陵東側と南斜面に広がっていたが、大部分は土砂採集工事により破壊されている。丘陵の裾に径6m・深さ60cmの竪穴、沢に近いところに径4m・深さ50cmの竪穴が観察された。採集した遺物は、第19図の東釧路Ⅳ式その他、北筒Ⅲ式・擦文土器・石鏃・磨製石斧などがある。

温根内川の右岸には6箇所の遺跡が存在する。温根内7遺跡(39)は、西縁の台地から1.5kmほど入った標高10mの台地上にあり、黒耀石製の削器及び剥片を採集した。200mほど下流に温根内5遺跡(40)がある。温根内川と温根内川に注ぐ小支流に挟まれた標高10mの台地先端部で、縄文期の遺物が採集されている。温根内4遺跡(41)は、小支流を挟んで5遺跡の対岸に位置する。標高15m、縄文期の遺物が採集されている。温根内遺跡(42)は、より下流の小支流左岸、標高10mの台地上に位置する。道路の切通し面より東釧路Ⅲ式土器が採集できた。同じ支流を300mほど遡った左岸に温根内6遺跡

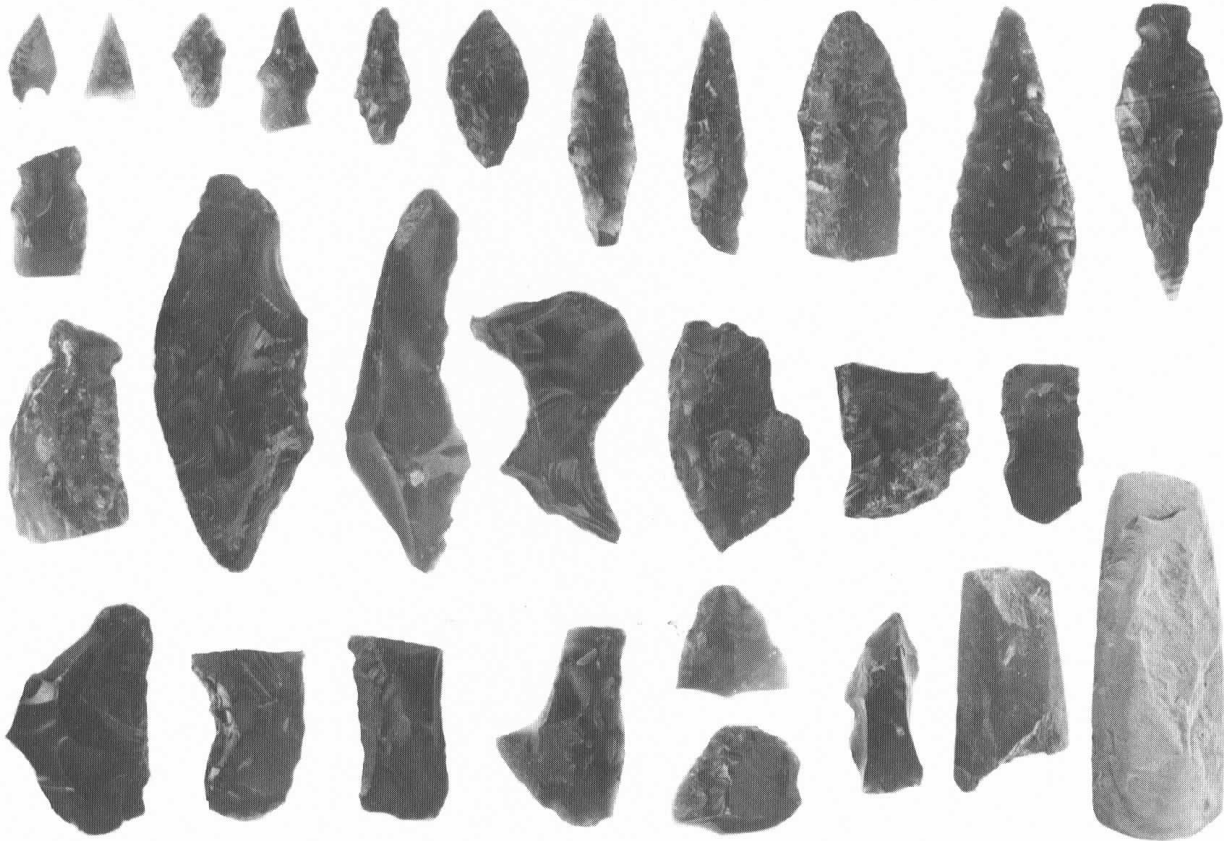
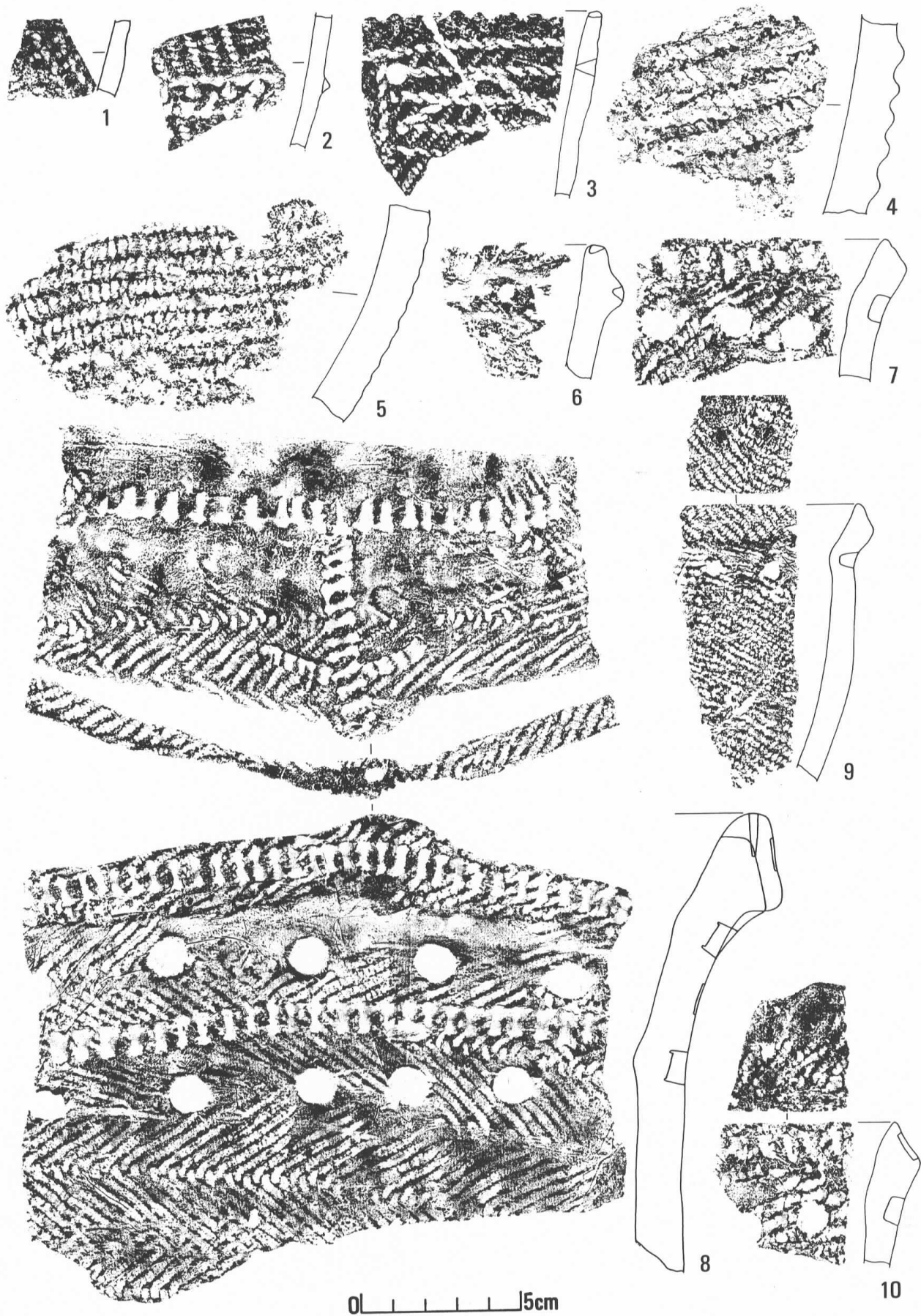
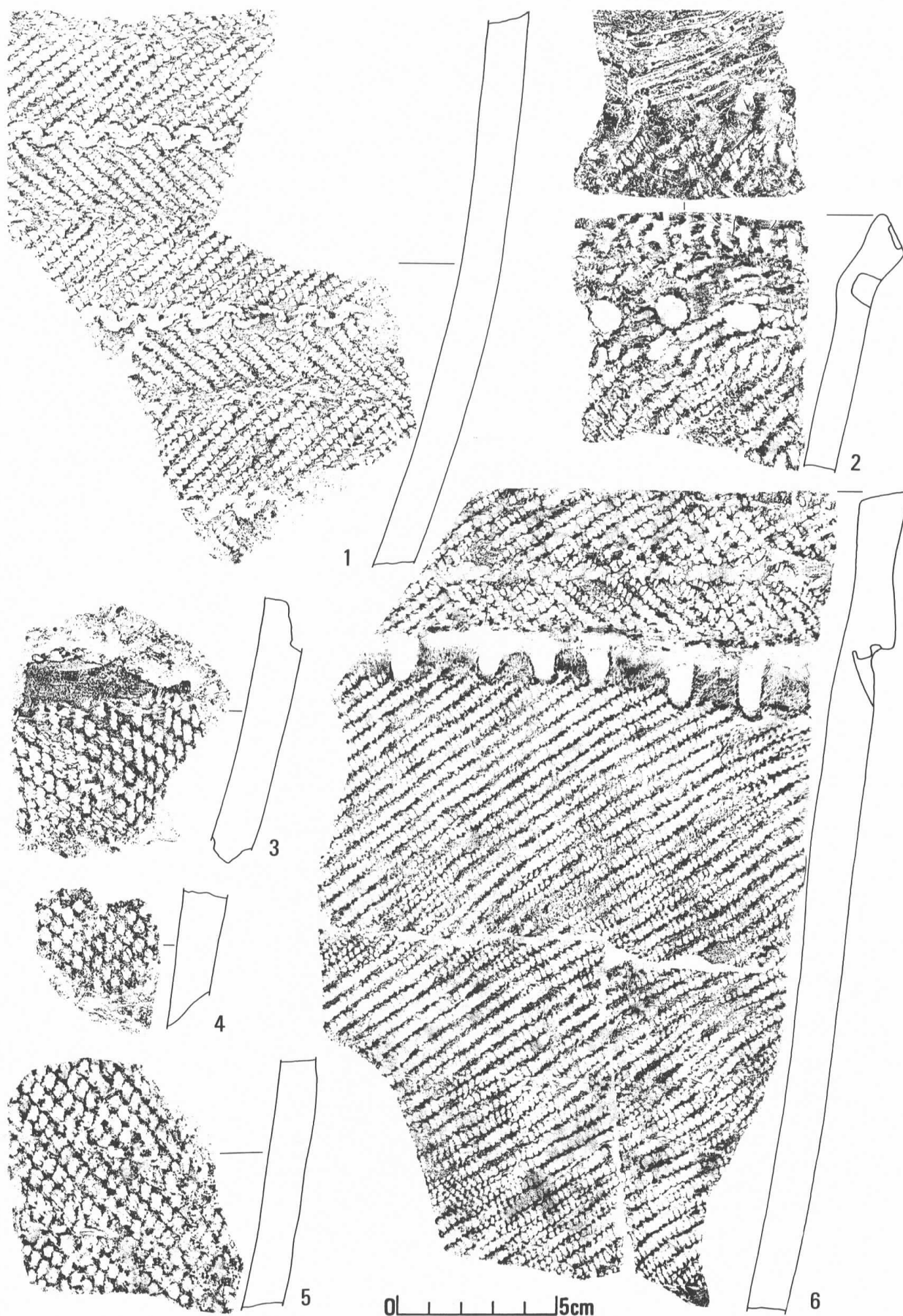


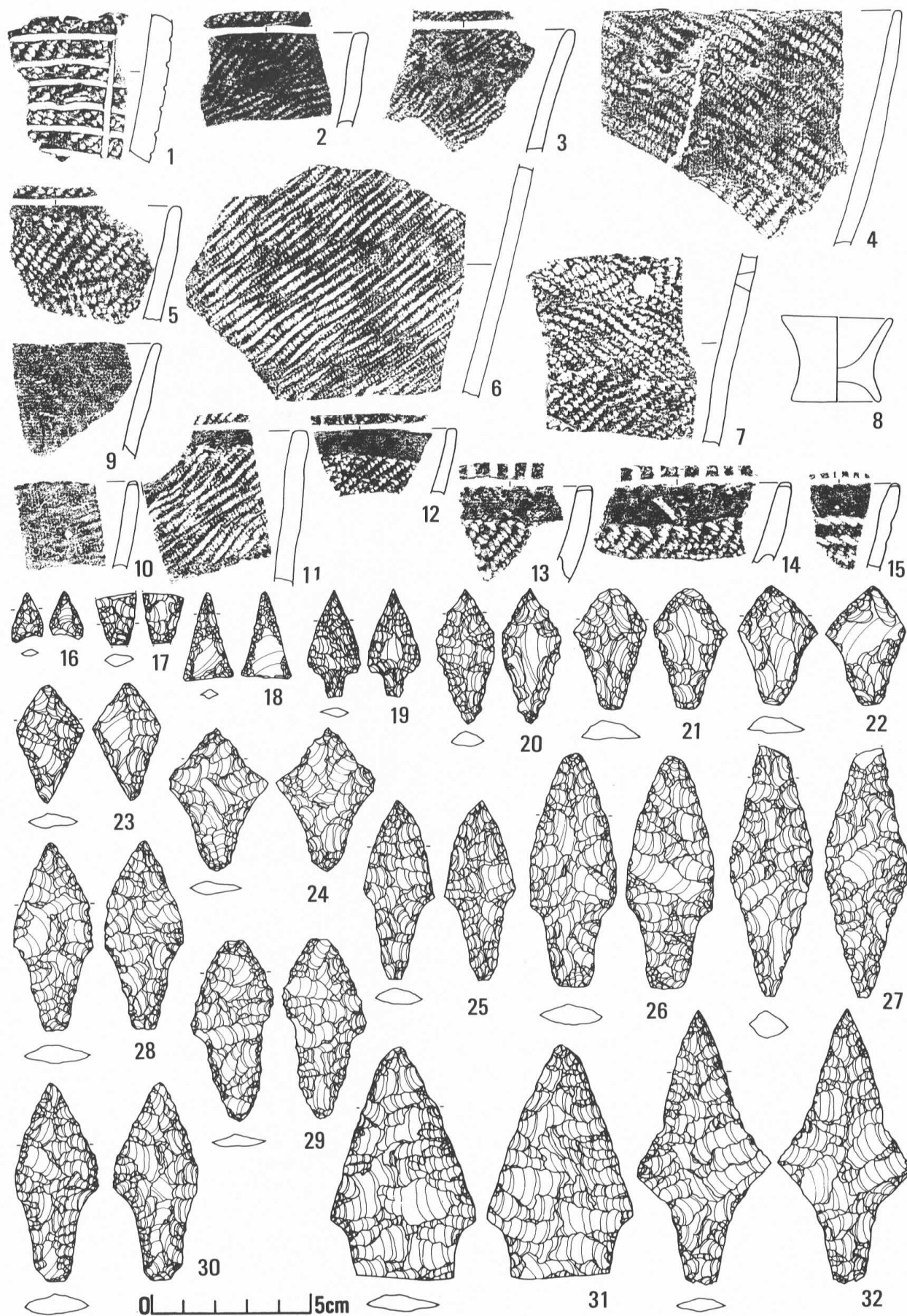
写真1 中幌呂3遺跡採集遺物(2)



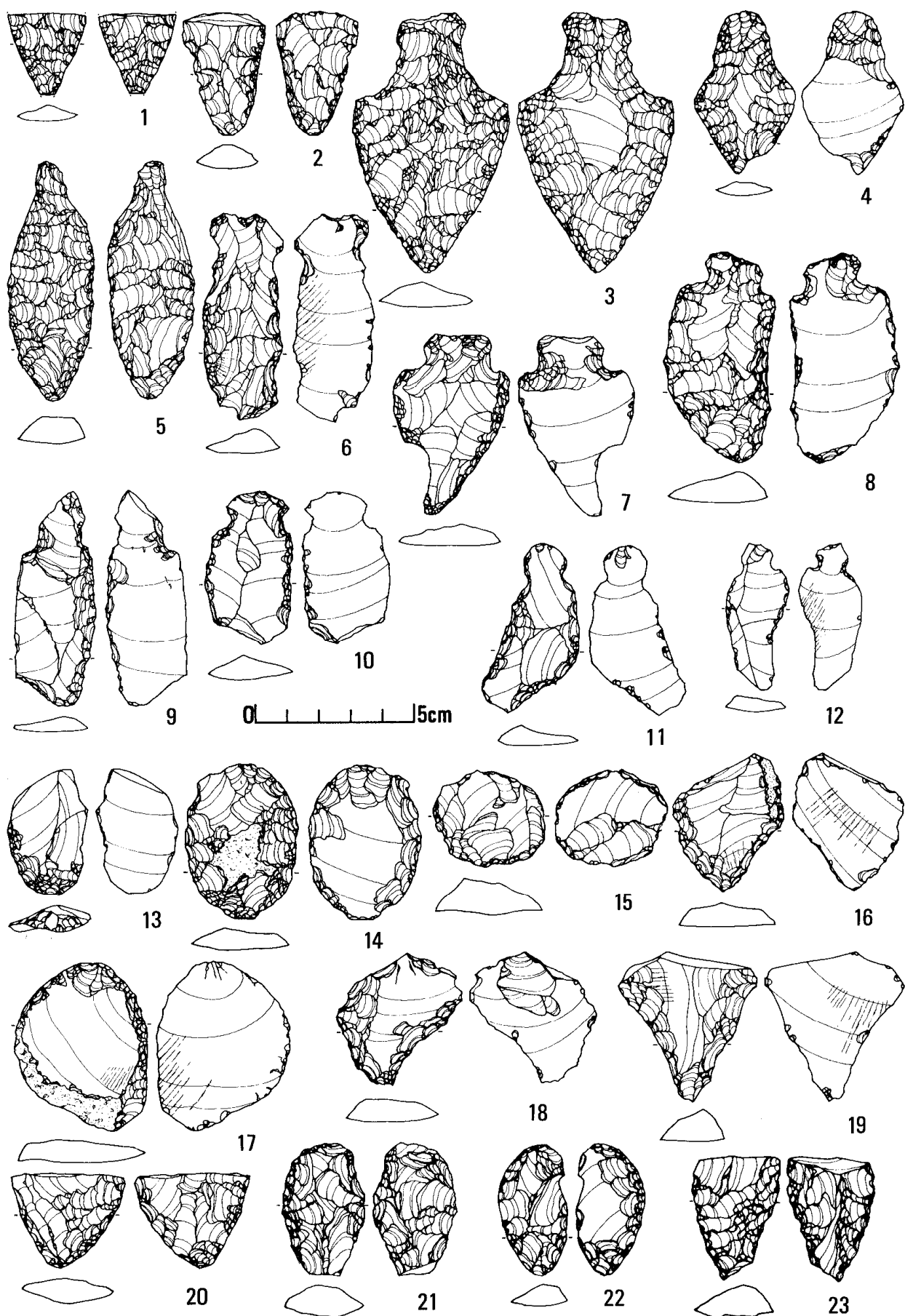
第13図 下幌呂1遺跡採集遺物(1)



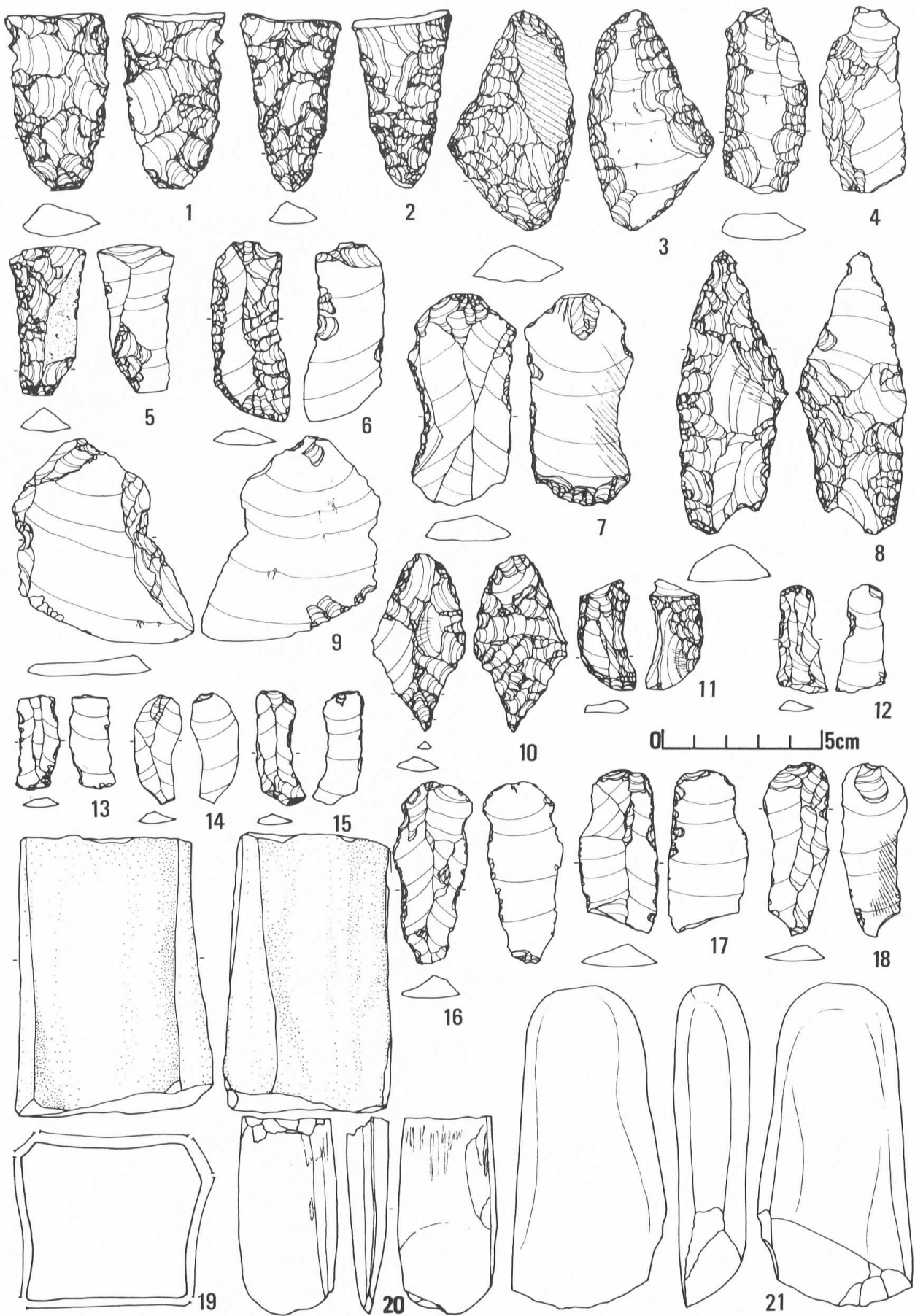
第14図 下幌呂1遺跡採集遺物(2)



第15図 下幌呂1遺跡採集遺物(3)



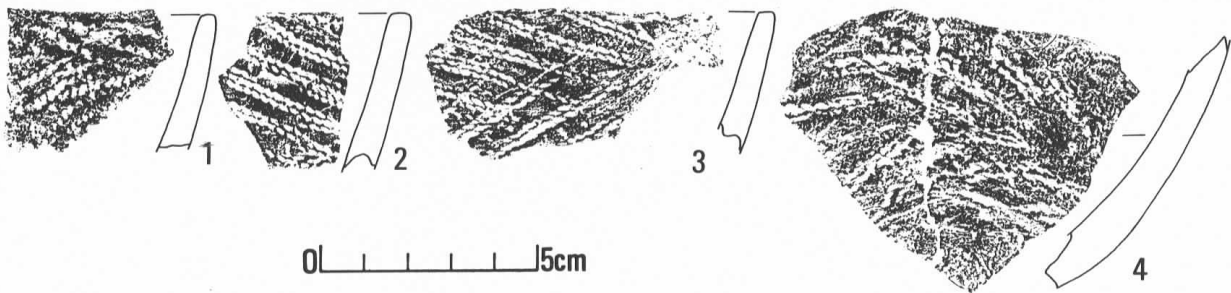
第16図 下幌呂1遺跡採集遺物(4)



第17図 下幌呂 1 遺跡採集遺物(5)



第18図 下幌呂1遺跡採集遺物(6)



第19図 下幌呂10遺跡採集遺物

(43) が位置する。中心部は土砂採取で消滅しているが、黒色土の露出している部分で東釧路Ⅲ式、北筒Ⅱ式土器を採集した。温根内1遺跡(44)は、温根内川に面した舌状台地の先端部に位置し、標高10m、湿原との比高差は5m前後である。北筒Ⅲ・Ⅳ式・擦文土器及び黒耀石製の搔器などが採集されている。

温根内1チャシ(45)は、湿原に面した標高40mの丘陵先端部に位置していたといわれるが、土砂採取工事により消滅している。温根内2遺跡(46)は、標高50mの丘陵頂部に位置し、縄文期の遺物や擦文土器などが採集されている。温根内第1堅穴群(47)は、湿原に面した標高10～20mの台地上で、湿原との比高差は5～15mである。堅穴群は南北に1km、東西に100mのかなり広い範囲に、縄文中期頃とみられる円形堅穴、擦文期の方形堅穴合せて114軒を確認した。台地は50～100mの間隔で小さな沢が入り込み、その沢を取り巻くように堅穴が分布する。方形堅穴は、一辺5～6m・深さ50～60cmの例が多いが、一辺15m・深さ1.5mを計る例もある。円形堅穴は、数が少なく北側に集中する傾向があり、大きさは径6m前後・深さ30～50cmを計る。

大島川1遺跡(48)は、西縁の台地から700mほど入った大島川の右岸、標高20～30mの丘陵先端部に位置し、丘陵上に径5mの落ち込みが1箇所、径4mの例が4箇所観察された。深さは30～50cmを計る。以前に縄文中期とみられる搔器が1点採集されている。

下雪裡第1堅穴群(49)は、湿原を西側に望む丘陵上に位置する。堅穴は標高50～70mの丘陵頂部と東側の緩斜面及び舌状張り出し部、さらに西側の標高10～15mの緩斜面や平坦面に121軒が分布する。大きさは一辺5～6m・深さ1～2mを計り方形を呈する。擦文期の集落址と考えられ、集落のあり方としては特異な様相を持つものである。下雪裡4遺跡(50)は、雪裡川の支流左岸、標高20mの丘陵先端部に、下雪裡5遺跡(51)は、4遺跡より入り込んだ沢の左岸に位置する。前者からは黒耀石の剥片、後者からは石鏃が採集されている。

下雪裡1チャシ(52)、下雪裡2チャシ(53)は、宮島岬より3kmほど北側に位置し、南東方向へ伸びる丘陵上に構築されている。丘陵の南西側は急斜面となっており、北東側は深い沢が入り込んでいる。1チャシは、標高80mのところ湿原に面してC字状の壕が連結して設けられ、高低差をもつ3つの面で構成されている。2チャシは、1チャシより先端へ300mほど行った標高50mのところ位置し、湿原に面してC字状の壕が設けられ、内部は2段の面で構成されている(西1980)。

宮島岬1遺跡(54)は、宮島岬の先端から600mほど

北側、標高80mの丘陵頂部に位置し、円形の落ち込みが11箇所認められる。久著呂太チャシ(55)は、宮島岬先端のほぼ中央部に位置する。標高50～60m、人工的とみられる段で2つの平坦面が構成されている。宮島岬3遺跡(56)は、東へ伸びる丘陵上にあり、標高50m、円形の浅い落ち込みが7箇所あり、林道の切通し面より土器片・黒耀石の剥片が採集されている。宮島岬2遺跡(57)は、標高10～20mのほぼ平坦面に20×40mの拡がりをもつ。北筒Ⅲ・Ⅳ式・続縄文期の土器が採集されている(澤 1971)。宮島岬4遺跡(58)は、湿原を東に望む斜面の途中の狭い平坦面上に位置する。標高は50mを計る。そこに、径8mの浅い円形堅穴が1軒あり、附近から石槍・磨製石斧・剥片などを採集した。

チルワツナイ3遺跡(59)は、チルワツナイ川に面した標高20mの台地上に位置し、径5m前後の円形の浅い落ち込みが2箇所確認できた。チルワツナイ川2遺跡(60)は、チルワツナイ川に注ぐ小支流を挟んで、チルワツナイ川1遺跡の対岸に所在する。標高10～20mの緩斜面上で、黒耀石の剥片を採集した。アキアジ沼堅穴群(61)は、アキアジ沼を望む標高20mの小さな独立丘上と周辺の台地に所在する。独立丘上に方形堅穴3軒、周辺に方形堅穴3軒、円形堅穴6軒が分布する。方形堅穴は最大の例で12×15mを計る。円形堅穴は、標高10mの台地先端部に径約4mの例が5軒、やや高い所に径9.5mの例が1軒ある。チルワツナイ川遺跡(62)は、キラコタン岬の西南端、標高10mの緩斜面に位置する。北筒Ⅱ式・緑ヶ岡式・興津式・下田ノ沢Ⅰ式などが採集されている(澤 1971)。チルワツナイ堅穴群(63)は、一段高い標高20mの台地上に所在する。台地の先端部に沿って径4～7mの円形の浅い落ち込みが10箇所確認されている。

キラコタン岬のほぼ中央部に比較的大きな沢が入り込んでいる。その東側、標高20mの台地先端部にキラコタン堅穴群(64)が位置する。径6mの円形堅穴2軒が確認されている。キラコタンチャシ(65)は、堅穴群の西側、標高40mの丘陵上に位置する。狭い尾根の西側に段があり、東側では若干窪んで一段高くなる。キラコタン第2堅穴群(66)は、キラコタン岬の東先端部から北側へ続く標高40～75の尾根上に分布する。径5～6m・深さ30～50cmの円形堅穴8軒を確認し、林道で黒耀石の剥片を採集した。キラコタン1遺跡(67)、キラコタン2遺跡(68)は、キラコタン岬より500mほど北側、久著呂川に面した沢の両岸に位置する。1遺跡は標高10m、2遺跡は標高10～20を計り、共に黒耀石の剥片が採集されている。キラコタン3遺跡(69)は、中央部の沢を1

kmほど遡った標高40mの北岸に位置する。黒耀石の剝片が採集されている。キラコタン4遺跡(70)は、キラコタン岬から1.2kmほど北側、久著呂川に面する標高30～50mの緩斜面上に位置する。南北に750m、幅180mの広い範囲から石鏃や剝片などが採集されている。

チルワツナイ川4遺跡(71)は、キラコタン岬より北へ7km遡ったチルワツナイ川左岸で、チルワツナイ川に注ぐ小さな沢の東側の丘陵上に位置する。チルワツナイ川からは、700mほど入り込む。丘陵は東へ傾斜し、標高は40～60mを計る。竪穴は東斜面及び北側の裾部に29軒が分布し、いずれも方形を呈する。大きい例で8×10m・深さ2.5m、小さい例で2×3m・深さ50cmを計る。本遺跡からは黒耀石製の短剣が採集されており、擦文期とより古い時期の複合遺跡であることが予測される。

下久著呂スキー場遺跡(72)は、久著呂川の支流ワタルンベ川右岸に位置する。標高20mの河岸段丘面で、遺跡はかなり大きな拡がりをもつとみられるが、遺物を採集した主体部は、学校建設や道路工事などにより破壊されている。遺物は、中茶路式・北筒Ⅱ・Ⅲ式・興津式・後北C₂式土器が採集されている(澤 1971)。

Ⅲ. 若干の考察

以上、釧路湿原西縁(鶴居村)の遺跡・遺物について紹介してきた。今回の踏査では、縄文中期・擦文期の集落址を含め17箇所の遺跡を新たに確認することができた。また、縄文早期から続縄文期にかけての遺物及び釧路地方では未検出の資料も得られており、これまで釧路湿原西縁でも空白の多かった部分がある程度埋めることができた。ここでは、それらの中でも特異な立地を示す二・三の遺跡について触れておきたい。

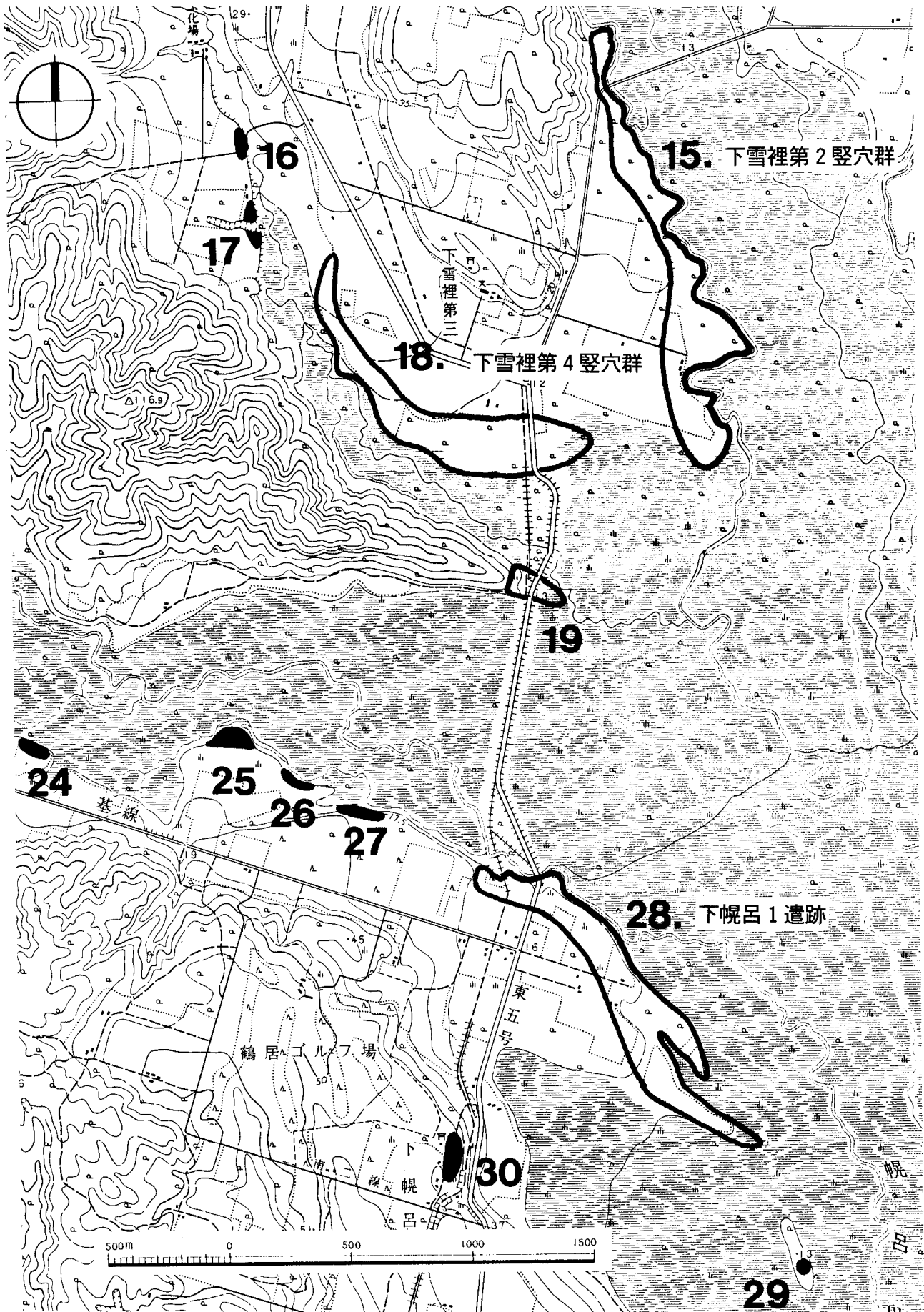
第1図でも明らかなように、湿原西縁の遺跡分布の傾向をみると、湿原に面する台地、大小の河川が湿原域へ流れ出る付近の兩岸の台地、及び各河川の流域に沿って遺跡が点在している。これらの遺跡は、いずれも標高10mを越え20～30mの台地に展開することが多く、後述するが、中には70mを越える尾根状のわずかな平坦面や緩斜面を利用して竪穴住居を構築している箇所もみられる。しかし、これとは逆に第20図に示したように、下幌呂1遺跡(28)・下雪裡第2竪穴群(15)・同第4竪穴群(18)では遺跡の拡がりや湿原域の低湿地へ下降して延長されており、標高10mを下り少なくとも7m程度の低湿地に集落址が展開するといった特異的な傾向がみられる。

特に下幌呂1遺跡は標高7～10m、10～15m、20m前後と三段の面にわたって拡がりをもつ縄文早期から晩期

にかけての遺跡である。採集された遺物をみる限り、標高7～10mの低湿地には、縄文中期とみられる竪穴住居址が明渠のカッティングに多数あらわれており、この時期の遺物も採集されている。また、後期から晩期の資料も広範囲にわたって採集されている。

縄文海進によって海水面が現在より3～6m上昇していたという縄文前期での数値(岡崎・澤1974)をひとつの目安とした場合、この付近一帯の低湿地の遺跡立地は海水との関係においては微妙な位置にあったといえる。しかし、採集遺物によると、縄文中期から晩期に限定されており、この時期が縄文海進の過程で海退期にあたる場所からすれば、これらの遺跡立地は後退する内湾の汀線と深く関わっていたとみることができる。明渠のカッティングでの観察によると、雌阿寒の火山灰(BP 500±90)降下後に泥炭層が堆積している。また、現在この地域は草地改良工事により以前の景観は失われているが、かつては、ハンノキ・ヨシ・スゲ群落で覆われた低湿地であったところである。こうしたことから、縄文前期以降、海退によって一時期低地の乾燥化が進み、その結果、集落を営む環境が整えられ、中期から晩期にかけて標高7m前後の低地が生活の場として利用されたものとみることができる。その後、この一帯は水面の上昇あるいは陸地の沈降により再び長期にわたり低湿地へと移行し、集落は標高10mを越える台地へ移動したと考えられる。続縄文期には本州では弥生海進が知られており、この地域においても海水面との関わりあいについて検討する必要がある。

下幌呂1遺跡と同じ現象は、下雪裡第2竪穴群の南側、同第4竪穴群の東側にも認められる。下雪裡第2竪穴群の低湿地からは、縄文後期中葉の鮭瀬式土器が採集されており、同第4竪穴群では、地点については明らかでないが、手稲式土器も採集されている。以上のようなことから、これまで湿原周縁の台地を含めて遺跡数の少なかった縄文後期には、これらの低湿地に比較的規模の大きな集落址が残されている公算が大きい。また、下幌呂1遺跡に隣接する孤島のボンボン山遺跡には、径20mを越える大きな落ち込みが残されており、今後の調査如何によっては縄文後期との関わりあいを追及できる可能性が十分にある。今回の低湿地遺跡の採集遺物により、これまでこの地方で未検出であった後期中葉の鮭瀬式、手稲式を加え、後半の堂林式及び末葉から晩期にかけての土器、更に晩期前半の土器群と、徐々にこの時期の空白が埋まりつつある。後期から晩期にかけての土器群の様相については、低湿地遺跡の調査を更に継続して行った上で改めて具体的に述べたい。



第20図 下雪裡・下幌呂附近の遺跡

次に擦文期に於ける堅穴群の立地と分布の傾向について触れておきたい。

西縁の台地でのこの時期の堅穴群の分布は、いずれも湿原域に面する台地にあり、しかも雪裡川・幌呂川・アシベツ川などの河川に面して位置している。多少、内陸部に入っても幌呂川の中幌呂堅穴群などは、僅かに2軒の堅穴住居址があるにすぎない。雪裡川・幌呂川・アシベツ川を例にとっても湿原域から離れた上流域には、川との比高5～15mの平坦な台地が展開しているにもかかわらず、堅穴群は確認されていない。しかし、一方では雪裡川に面した下雪裡第1堅穴群のように標高70mの尾根の頂部や緩斜面など限られた地域に、しかも条件にさほど恵まれない箇所121軒の堅穴が集中している場合がある。こうした現象が見られることは、明らかに雪裡川に遡上するサケ・マスが生業の主たる対象であったと考えられる。また、上述したように上流域に大きな集落が見られないということは、サケ・マスの産卵場とも深く関わっていたとみられ、同じ湿原西縁の仁々志別川流域における擦文期の集落址のあり方と同様な傾向が窺える(澤ほか1981)。一方、宮島岬とキラコタン岬の間を流れるチルワツナイ川を湿原域から7kmほど上流に29軒の方形の堅穴住居址をもつチルワツナイ川4遺跡がある。大きい堅穴で径10m、深さ2.5mあり、いずれの堅穴も2m前後と深く、20mほどの高低差をもつ傾斜面に位置している。入口部分をもつとみられるものもあり、この周辺における擦文期の堅穴とはやや異質の感がある。

釧路湿原西縁の遺跡分布の傾向については、今回の踏査で東縁の台地に劣らず有舌尖頭器の出現以降、時期的に見ても比較的間断なく土地利用の行われていることが確認された。そして、これらの遺跡立地はすでに紹介した湿原南側の大楽毛砂丘地(澤ほか1982)に加えて低湿地にも残されるという自然環境に即応した集落のあり方が認められた。この結果を踏まえながら、今後、更に本格的な発掘調査及び踏査を重ねた上で、湿原周縁の遺跡立地と遺跡分布の傾向、あるいは低湿地遺跡の性格などについても具体的に検討を加えていきたい。

引用・参考文献

- 岡崎由夫・澤 四郎(1974)「自然先史編」新釧路市史 第一巻
- 小西雅徳(1974)「鶴居村調査報告」マタギ4号
- 澤 四郎他(1960)「阿寒郡鶴居村の先史時代の遺跡—中雪裡・茂雪裡・下雪裡地方—」釧路博物館報 No104
- 澤 四郎(1969)「釧路川流域の先史時代」釧路叢書第11巻 釧路川
- 澤 四郎(1971)「鶴居村キラコタン崎付近の遺跡踏査報告—釧路湿原の総合調査の一環として—」釧路博物館報No213
- 澤 四郎・橋本正雄(1972)「鶴居村宮島崎踏査報告」釧路博物館報No214
- 澤 四郎他(1973)「温根内付近の遺跡踏査」釧路博物館報No220
- 澤 四郎・西 幸隆(1974)「北海道鶴居村下幌呂A地点出土の遺物について」釧路博物館紀要第3輯
- 澤 四郎・西 幸隆(1975)「釧路湿原周縁の遺跡分布」釧路湿原総合調査報告書
- 澤 四郎・西 幸隆(1977)「釧路湿原周縁の遺跡分布の変遷」釧路叢書第18巻 釧路湿原
- 澤 四郎・西 幸隆・松田 猛(1981)「阿寒町の遺跡分布調査」釧路博物館報No270
- 澤 四郎・西 幸隆・松田 猛(1982)「釧路市大楽毛砂丘の遺跡について」釧路博物館紀要第9輯
- 澤 四郎・西 幸隆・松田 猛(1984)「道東海岸線の遺跡分布」道東海岸線総合調査報告書
- 鷹野光行(1981)「晩期の土器 北海道の土器」縄文文化の研究4 縄文土器II
- 西 幸隆(1973)「鶴居村中幌呂出土の石器について」釧路博物館報No221
- 西 幸隆(1980)「中田牧場第一・第二チャシ」日本城郭大系I
- 北海道教育委員会「埋蔵文化財包蔵地調査カード」

表1 鶴居村の遺跡地名表

No.	遺 跡 名	種 類	時 代	時 期	備 考
1	茂雪裡 6 遺跡	包含地	縄文		第1図に地点は入っていない
2	茂雪裡 5 遺跡	包含地	縄文		
3	茂雪裡 4 遺跡	包含地	縄文		
4	茂雪裡 3 遺跡	包含地	アイヌ		脇差 1 点
5	茂雪裡 2 遺跡	包含地	縄文		
6	茂雪裡 1 遺跡	包含地	縄文		
7	四号の沢遺跡	包含地	縄文		
8	中雪裡 チャシ	チャシ	アイヌ		
9	中雪裡 1 遺跡	包含地	縄文中期	北筒Ⅲ式	
10	中雪裡 2 遺跡	包含地	縄文中期	北筒Ⅲ式	
11	下雪裡 2 遺跡	包含地	先土器、縄文中期	有舌尖頭器、北筒式	
12	下雪裡第3 堅穴群	集落址	擦文		方形堅穴 6 ・ 円形堅穴 2
13	下雪裡 3 遺跡	包含地	縄文		
14	下雪裡 1 遺跡	包含地	アイヌ		山刀 1 点
15	下雪裡第2 堅穴群	集落址	縄文早・中・後・晩期、続縄文、擦文	東釧路Ⅲ式、北筒Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式、鯉淵式、 下田ノ沢Ⅰ式、後北C ₂ 式、擦文	方形堅穴32
16	下雪裡 7 遺跡	包含地	縄文早・中期、続縄文	石刃鏃、北筒Ⅲ式、後北C ₂ 式	
17	下雪裡 6 遺跡	集落址	擦文		方形堅穴 6
18	下雪裡第4 堅穴群	集落址	縄文早～晩期、擦文	東釧路Ⅲ・Ⅳ式、網文、北筒Ⅲ式、手稲式	方形堅穴34
19	アシベツ川右岸遺跡	集落址	縄文早期	石刃鏃、条痕文土器、東釧路Ⅳ式	方形堅穴 3 ・ 円形堅穴 1
20	中幌呂 3 遺跡	包含地	縄文早・中・晩期	中茶路式、北筒Ⅲ式	円形堅穴 1
21	中幌呂 堅穴群	集落址	擦文	擦文	方形堅穴 1
22	中幌呂 2 遺跡	包含地	縄文中・晩期		
23	中幌呂 1 遺跡	包含地	縄文		
24	下幌呂 14 遺跡	包含地	縄文中・晩期	北筒Ⅱ式	
25	下幌呂 13 遺跡	集落址	縄文早・晩期	東釧路Ⅲ式	円形堅穴 2
26	下幌呂 12 遺跡	集落址	縄文		円形堅穴 3
27	下幌呂 11 遺跡	集落址	縄文		円形堅穴 4
28	下幌呂 1 遺跡	集落址	縄文早～晩期	石刃鏃、条痕文土器、東釧路Ⅲ式、 網文、モコト式、北筒Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ式	円形堅穴 4 以上 (低湿地でも観察された)
29	ボンボン山遺跡				山頂部に堅穴様凹地
30	下幌呂 2 遺跡	包含地	縄文早・中期	東釧路Ⅲ式、北筒Ⅱ式	
31	下幌呂 3 遺跡	包含地	縄文早・中期		
32	下幌呂 4 遺跡	包含地	縄文早・後期末晩期初頭	東釧路Ⅲ式	
33	下幌呂 5 遺跡	包含地	縄文		
34	下幌呂 6 遺跡	包含地	縄文		
35	下幌呂 7 遺跡	包含地	縄文前・晩期	網文、緑ヶ岡式	
36	下幌呂 8 遺跡	包含地	縄文		

No.	遺 跡 名	種 類	時 代	時 期	備 考
37	下 幌 呂 9 遺 跡	集落址	縄文中・後期末晩期初頭・晩期	北筒Ⅲ・Ⅳ式、緑ヶ岡式	方形竪穴 2・円形竪穴11
38	下 幌 呂 10 遺 跡	集落址	縄文早・中期、擦文	東釧路Ⅳ式、北筒Ⅲ式、擦文	円形竪穴 2
39	温 根 内 7 遺 跡	包含地	縄文		
40	温 根 内 5 遺 跡	包含地	縄文		
41	温 根 内 4 遺 跡	包含地	縄文		
42	温 根 内 3 遺 跡	包含地	縄文早期	東釧路Ⅲ式	
43	温 根 内 6 遺 跡	包含地	縄文早・中期	東釧路Ⅲ式、北筒Ⅱ式	
44	温 根 内 1 遺 跡	包含地	縄文中期、擦文	北筒Ⅲ・Ⅳ式、擦文	
45	温 根 内 チ ャ シ	チャシ	アイヌ		臨川性、土砂採集により消滅
46	温 根 内 2 遺 跡	包含地	縄文、擦文		
47	温根内第 1 竪穴群	集落址	縄文中期、擦文		方形・円形竪穴114
48	大 島 川 1 遺 跡	集落址	縄文中期		円形竪穴 5
49	下雪裡第 1 竪穴群	集落址	擦文		方形竪穴121
50	下 雪 裡 4 遺 跡	包含地	縄文		
51	下 雪 裡 5 遺 跡	包含地	縄文		
52	下 雪 裡 1 チ ャ シ	チャシ	アイヌ		臨川性・面崖式・C字状壕
53	下 雪 裡 2 チ ャ シ	チャシ	アイヌ		臨川性・面崖式・C字状壕
54	宮 島 岬 1 遺 跡	集落址	縄文		円形竪穴11
55	久 著 呂 太 チ ャ シ	チャシ	アイヌ		臨川性・丘先式
56	宮 島 岬 3 遺 跡	包含地	縄文中期	北筒式	円形竪穴 7
57	宮 島 岬 2 遺 跡	包含地	縄文中期、続縄文	北筒Ⅲ・Ⅳ式	
58	宮 島 岬 4 遺 跡	集落址	縄文中期		円形竪穴 1
59	チルワツナイ川 3 遺跡	集落址	縄文		円形竪穴 2
60	チルワツナイ川 2 遺跡	包含地	縄文		
61	アキアジ沼竪穴群	集落址	擦文		方形竪穴 6・円形竪穴 6
62	チルワツナイ川遺跡	包含地	縄文中・晩期、続縄文	北筒Ⅱ式、緑ヶ岡式、 興津式、下田ノ沢Ⅰ式	
63	チルワツナイ竪穴群	集落址	縄文		竪穴10以上
64	キラコタン竪穴群	集落址	縄文		円形竪穴 2
65	キラコタンチャシ	チャシ	アイヌ		
66	キラコタン第 2 竪穴群	集落址	縄文		円形竪穴 8
67	キラコタン 1 遺 跡	包含地	縄文		
68	キラコタン 2 遺 跡	包含地	縄文		
69	キラコタン 3 遺 跡	包含地	縄文		
70	キラコタン 4 遺 跡	包含地	縄文		
71	チルワツナイ川 4 遺跡	集落址	擦文		方形竪穴29
72	下久著呂スキー場遺跡	包含地	縄文早・中期、続縄文	中茶路式、北筒Ⅱ・Ⅲ式、 興津式、後北 C ₂ 式	